

# 西行の虚像性（上）

植村雅史

## I 序

拙稿「中古末法期から紐解く現代社会の死生観序説」<sup>1</sup>では西行の生涯を、武家社会勃興の契機となった騒乱へと革命的な変遷をたどった時代背景を基に、かれの周辺で生じた事蹟とそれらに深く関係したと思われる人物との関わりに焦点を当てクロノジックに追った。その作業における資料の多くは、西行研究の先達のものによったのだが、それらは近現代の西行研究、すなわち近世までの虚像としての伝説的人物「西行」から、あくまでも実像としての「西行」を追究するための論まで多彩なものであった。そこで本稿においては、「実像西行」の思想に迫るためにも、虚像に惑わされる可能性を低減させるためにも、二十世紀直前まで語り継がれてきた「道念を貫いた仏者」「漂泊の歌僧」などの文学史的イメージともいえる「虚像西行」を明確にしておきたいと考えている。

中世における「西行伝」を彩ったものには、『西行物語絵巻』『西行物語』『西行一生涯草紙』『西行上人発心記』『撰集抄』などが挙がる。そして、近世に至っても民間伝説に基づいた中世的小説はこさえられつづけた。『扶桑隠逸伝』や『大日本史』『歌人列伝』、『扶桑故事要略』『百人一首一夕話』などである。このように他者によって虚像がつくり上げられるには、それ相応の理由があるはずである。つまり、それが西行譚を残した第三者の目的ということになる。それを考察してみることで、作者・編者にとって都合の良い「西行像」という虚像が見えてくると仮定し、ここでは伝記・説話という形でかれの没後半世紀頃にはすでに現れていたとされる『西行物語』『撰集抄』という代表作のうち、『西行物語』をとりあげ、そのすべてのテキストの要略とともにその内容から区切った各段

における主題を（上）（下）にわたり推し量ってみようと思う<sup>2</sup>。

そもそも『西行物語』は、西行の人生を時系列に追った一代記である。しかしすでに先学により史実との比較において、その時間的・空間的矛盾が指摘されている部分が多数に上ることも明らかになっている<sup>3</sup>。たとえばすでに陸奥旅は少なくとも二度敢行されていることが考証されているが、『西行物語』では一度に集約されているといった具合である。そして、そのことで時間的（年齢的）な齟齬が生じている。さらに、出家後の最長区分である「高野参籠時代」がごっそり抜け落ちていることも挙がる。そのような矛盾点にも触れながらの作業にはなるが、それ以上に本稿において追究すべき点は、作者の描きたかった人物像、言い換えるならば読み手や聞き手に伝えたかった「西行的人間」像である。もっといえば、この『西行物語』によって何を表現したかったのかということである。よってさまざまな矛盾点も、単にそれ自体をあげつらうということではなく、それらを読み解くことで見えてくるリーディングポイントに重きを置くこととなる。つまり、なぜ矛盾を生じさせてでも、そのテキストを造形したのかということが重要になってくるということである。

## II 出家までの葛藤

鳥羽院の御時、ほくめんに、めしつかはれし人侍りき。左兵衛のせう、藤原憲清<sup>4</sup>——

【1】鳥羽院の御代、院北面に左兵衛尉藤原義清<sup>5</sup>、出家後に西行法師となる人物がいた。という、西行の紹介から物語は開始される。拙稿「中古末法

期から紐解く現代社会の死生観序説(上)』<sup>6</sup>II-3系譜で触れたものとはほぼ同様に、大方史実に適合しているものであるが、父方の系譜のみであることが武勇の血を受け継ぐ男性的なパーソナリティを印象づけたいがための工夫と見ることもできる。

花の春の、詩歌、もみぢの秋の月の艶、かゝりの  
下のしうきく、南庭の御弓――

【2】花の春の詩歌の会など、四季、節句などに合わせて行なわれる天皇主催の宴には、決まって義清は呼ばれていた。それほどに帝からの朝恩を受けていた。それはかれの家が豊かで大層な人材を輩出した家柄でもあったからということ。それでも帝は、さらに義清の処遇を良きものにしようとして検非違使佐に任命しようとするのだが、それを『莊子』にある故事になぞらえて辞退するという話。

天皇上皇からそこまでの恩恵を受けていたという史実はないところだが、義清はこのころすでに、現世がかりそめで無常たるものであることを理解していたことを思わせる。

そも／＼、しつかにあんするに、人身をうくる事、  
ほん天より、糸をくたして――

【3】人は幻の栄華に憧れ、妻子の存在に縛られ、そのことで来世での苦難という因縁を結ぶ、なんとあわれなことであろう。これまでの二十五年の人生を思っても、うたた寝の夢よりも儂いものであったし、これからもそうであろう。しかしわれわれは西方の教法を知る機会をえたのだから、修行に励まずに、悟りを開かずにいるのはどれほど愚かなことであろう。このような理を思惟するたびに、義清の出家への志は深まるのであるが、その一方で天皇上皇からの恩寵や妻子への恩愛は捨て難いものである。そうして時間を無駄にしていることが浅薄に思えるという話。

この段は、一見義清の出家に至る心模様を描くことで、かれの人間性を照射しているようにも思えるが、それ以上に義清の思惟という形をとって

教理を読み手・聞き手に説法しようとする狙いが存在しているように思われる。

此人つねに、なにはつの風をあふき、心のうちの  
ちりをはらひ――

【4】この人は、常に和歌の道に親しみつつ思いを凝らす機縁としていた。なので、天皇上皇からも折に触れて歌題を与えられ、その折々にすぐさま題詠していたという話。

直前の段では仏道に引き寄せた西行像を、そして次には歌道の才に秀でた人物像を紹介する流れととれる。ここまでは、「仏道」「歌道」のバランスがどちらかに傾いている造形ではない。

大治二年、十月十日比、鳥羽殿に、御幸ならせ給  
ひて、はしめたる――

【5】大治二年十月十日の頃に、鳥羽院が鳥羽離宮に御幸なされ、改装後の障子絵をご覧になり、その優雅な様をたいそう気に入り、経信・匡房・基俊そして義清を召して、彼らにそれらすべての絵を題にして一首ずつを詠歌するよう命じた。皆が詠みあぐねているなかで義清はその日のうちに申奏した。すると、そのすべての歌を当代きつての名筆に障子絵そばに書かせただけでなく、御剣やら十五枚重ねの衣などを賜わった。そのことで羨望のまなざしを向けられる優越感や名誉に浸りつつも、現世の執心が深くなってしまうと悩むものであったという話。

ここでは、俗塵をまだまだ受容してしまう心と、それに苦しむように現れる道心との間で徘徊する出家前の像を描写している。ただ、現実的にはこのような史実は残っていないうえに、出家以前の歌才もまだまだこれほど高評価をえていたとも考えづらい。前段と合わせて、歌人として早成していたという像を『物語』序盤で構築しておきたいという作者の狙いがうかがえる。

かくて、日にしにかたふき、月東に出るほどに、

をよひて、あひしたしき、佐藤左衛門尉——

とおしくおもふ、むすめの、四になるか——

【6】親しき仲にあった佐藤左衛門尉憲康と帰路を共にしているとき、これまで先祖の秀郷将軍から今に至るまで帝の恩恵を受けてこられているのにもかかわらず、それらすべてが夢幻のように儚く思えてきて仕方がないので出家などを考えるようになってしまったと、憲康が真剣に話しはじめたのを聞き、同じようなことを考えてきた義清も胸に去来するものを感じ互いに袖を濡らした。そして明朝、鳥羽殿へ参じるにあたり憲康邸に立ち寄ることを約束し別れた。すると翌朝、憲康邸の前が騒がしくなっているので歩み寄ってみると、妻と母が伏して泣き崩れていた。昨夜眠りに入り、そのまま亡くなったとのことだった。それを目にした義清はいよいよ無常を歎じ、その足で鳥羽院に暇乞いを願うために馬を走らせたという話。

有名なこの段は、『物語』における義清の出家の直接的な契機として語られている。無常観、厭世観がかれの出家の要因であるとして、全編に通底するテーマを明確にした場面と思える。

ことに、きらめきて参りたりければ、折ふし鳥羽殿には、御ゆふありけるに、やかて——

【7】鳥羽殿に参じてすぐさま出家の暇乞いを申し入れたが、その許しをもらうことはできなかった。しかしこのまま主君の訓戒を恐れて、いつものように愛着ある我が家へと戻れば、これまでの出家を望みつつも行動に移せず時間を浪費していたことのくり返しになってしまう。どうか仏よ、今度ばかりはこの思いを果たすことに障害を与えずに出家させたまえと祈念して帰路についたという話。

現世の無常を歎きつつも、近しい人たちとの縁を絶つことに躊躇する心情。しかし今回ばかりは強い意志をもって実行に移そうとしている、心の内での宣言を描写して次の段につづけて行くという流れである。

夕にをよひ、宿所にかへりさしいれば、年ころい

【8】夕刻屋敷に帰ると、四歳になる娘が狩衣の袂にすがってきた。これまで出家に踏み切れなかった理由がこの愛児故のことと思ひ起こし、胸を締めつけられながらも今度ばかりはと縁から蹴落とした。妻はといえば、すでに義清のかねてからの思いを察していたことで驚くことはなかったという話。

『西行物語絵巻』にも描かれる西行伝を代表する一段である。無住の『沙石集』に同様の文章が見てとれる。どちらが先行した話であったかは不明だが、とにかくこれまでの解釈では、その多くが義清の気性の激しさや武士の血気のような男性的印象としてとられている。しかし直前のテキストからの流れを追った場合、これまで躊躇していた思いを行動に移すための「心の内での宣言」をしたあとで、いよいよそれを断腸の思いで「身での体現」を敢行した、すなわちまるで気性や血気というものではなく、それとはまったく逆の心境によってトレードオフしているのとらえる方が自然であろう。

月すてに中はふけて、みねのあらし、のきはの松にひゝき、よそのきぬたこゑうれへ——

【9】月はすでに天の半ばを過ぎて、すべての物事が心細くなるような時間に、妻に出家後の約束事を話してみたものの、ただただ泣くばかり。そこで釈迦の弟子であった阿難尊者を喩えにして、今生の別れというのは一過性のものであって、縁で結ばれた者同士というのは来世でも同じ蓮のうえに生まれる身となるという真理を悟ろうではないかと説き伏せようとするが、一向に返事をしないという話。

前段で娘との縁を断ち切る行動を起こした義清だが、さらに今度は愛妻との絶縁を果たさねばならない。すでに夫の思いに気づいていた妻ではあったが、いざ現実となったときに気持ちはタイムリーにはついてこないという人間の性を描いてい

る。この段も読み手・聞き手に説示しているものと解釈できると同時に、行動を起こす者とそれを受容せねばならぬ者、つまり夫と妻という立場の違いによって、その心境は大いに異なるという現実世界での普通の心理のようなものも作者が込めているようにも思われる。

大かた、ほいなくはおもへとも、とゝまるへき道  
ならねは、心つよくおもひ切て、みつから――

【10】妻子のことを思いつつも、事此処に及んで決心を覆すこともできないので、髻を切って後ろ髪を引かれつつも二十五年<sup>7</sup>住み慣れた屋敷を出た。西山の麓に知人の聖がいることでそこへと向かう。そして暁のころにいよいよ出家し、法名を西行とした。義清と同時に源季正も出家し、西住とした。翌朝、庵近くに棲む聖たちが集まってきて、出家に驚くとともにその怪しさを感じていることに対して西行は歌にて答えたという話。

西山の麓で出家したということは、事実認定はできないまでも、拙稿「中古末法期から紐解く現代社会の死生観序説(上)」<sup>8</sup> IV-1草庵閑居からも近いものかもしれない。しかしこの段でつくられようとしている像は、近隣の聖たちの「こはいかに」の質問へよどみなく歌で返しているという行為に秘められているように思われる。実像としての西行が、そのような問いかけに対して歌ではなく言葉であったとしても、果たして即答するような人物であったらうか。どちらにしてもそのことの証明はできないが、ここで作者が求めた像はそのくらいに歌才に秀でた人物であったというものであり、その印象を確立したかったということではないだろうか。

それねはん経の、三馬のたとへにあたりて、はや  
くも世をすてぬ事――

【11】涅槃経に説かれている三馬の喩えのとおり、早々に現世を離れられたことは幸いなことだ。たまたまにも仏法と出逢い、因果の理を知り、い

くつかの善い縁にも恵まれ、悟りに向かう道を開くことができた。どのような宗派も学ばず、どのような行も修めずに、誰にでもある仏性を具しながら、流転しながら妄執の生を送り、現世を離脱する契機をえないことはなんとも愚かなことである。今生一世だけでなく、来世にはさらなる流転の業を深めることとなり、六道の世界をめぐる四種の生まれ変わりに苦しみ、永遠にくり返す生死を経験し、多くの苦しみに遭うことはつらいことである。だからこそこの時に、恩愛の絆を切って、道門に入ったことがうれしくもあり、西山の柴に庵を結んで棲みついているのであるという話。

これは、これまでのテキストのなかでもっとも説教臭い内容である。自身の出家に際しての自己肯定のために、それが成しえない他者を引き合いに出すというものである。真に仏道に専心している者であれば、このような他者と自己の対照という観念すら生じないのではないだろうか。これは西行が出家間もない時期であることで、まだまだ修行が浅い皮相的というレトリックであるともとらえられるが、そうではなく作者の強い思想性が表出しているようにも思える。まさに西行に仮託して、衆生へ仏法に帰依することを勧めたいという、見方によっては俗な思惟ともとれる主題という解釈である。

### III 庵暮らし

としもくれぬ。去年までは、なにとなく、公私につけてありし事ともおもひ出て――

【12】年が暮れる。そこで、去年の年末までは何とも思っていなかったような、公私における年末ならではの諸事を思い出しているという短い話。

遁世前後で、心だけではなく暮らしのなかにも大きな変容があったことを伝えたいようである。すなわち、出家前の暮らしにおいてはいかに空虚なことが多かったか、どれだけ今が清貧かということ、それこそが仏の道にあることだと言わんばかりである。

あらたまの、年たちかへるあしたは、君の御ため  
身のため、千秋萬歳――

【13】新年を迎えた朝は、主君のためそしてわが身のため千年万年の長寿となり、富にも満ちた生活を、と祝っていたことも夢幻の如きもので、まさに悟りにあらぬ凡夫の浅膚であったと思い、西方に向き、臨終のときには心安らかに、死後は極楽へお導きくださいと祈るのだった。数ならぬ住まいではあるが、花というのは春を忘れぬもので、庵の前の梅は咲き匂い、行き過ぎる人を立ち止まらせるという話。

ここで採られた歌は、ひとり仏道専心する庵に人が集まることに一見困惑している風体の西行ではあるが、その一方では斯様な風情についての話ができる人を待っているという、まだまだ俗心残るという状態であることを伝えようとしていることを想起させる目的で使われていると思われる。

しはのあみ戸のあけくれは、佛の、御むかひを、  
いつならんとまちたてまつるに――

【14】柴の庵での朝晩には、仏のお迎えはいつのことだろうかと待ちつづけている境地にあるのだが、世俗にいる旧友は花見にと集りきて、何ともない昔話を聞いても心が乱れるだけで良いことはないと歎くものであるという話。

前段につながっているような内容である。同じようなテキストを並べた意図は、次の段より西山辺りから伊勢へと移住することになるその楔として利用したかったのであろうと考えられる。

扱も、太神宮にまふて侍りぬ。みもすそ川のほとり、  
杉のむらたちのなかにわけ入――

【15】その後、伊勢神宮へ詣でて一の鳥居の前にて神殿を拝み奉った。そもそも神宮では、仏法僧の三宝の名を忌み、法師は神殿に近づき参拝できないこととなっている。その理由は天照大神に見

える古の神話に因んでいるのだが、その天照は外面では沙門を忌むものの、内実的には仏法を守護なされたのであった。内宮は胎蔵界の大日如来、密教のいうところの曼荼羅を、外宮は金剛界の大日如来、浄土教のいうところの阿弥陀を並べ奉っている。その神宮は代々の帝の霊を祀るところとなってきた。不生不滅の盧遮那仏が、人々に生死の流転を止めさせて常住の仏道に入れるために本地垂迹して現れてくださった。だからこそ、仏法修行する者は神の御心にも叶いもするが、道心なき者は神慮にも叶わないのであると本地垂迹の有難さを思うと信仰の涙で袖も濡れるという話。

厳密には、古事記で伝わる神話とは異なる内容でみられるテキストだが、ここでも道心への誘いが話の筋を成している。さらに本地垂迹、神仏集合思想が現れたということで、西行に仮構して当代の思想史を語っている形となっている。

神路山の、あらしおろせは、みねのもみちはみも  
すそ川のなみにしき――

【16】神路山の嵐が吹き下ろしてくると、峰の紅葉は御裳濯河の水面に敷き詰められ、まるで錦の如きであり、神殿の垣となる松を目にすれば、千年同じの緑が梢に現れる。その後ろの御山からは、月が澄む光とともに上ってきたので二首詠うという話。

ここで採られる二首では天照と本地垂迹を詠っているのだが、前段のつづきとしての色彩が強いテキストである。

いつくもつみのすみかならねは、かたしけなくも、  
あまてる、御神のにはに、侍りて――

【17】せっかく天照大神の庭先である伊勢にいるのだから、美しい名所である二見浦に庵を結んだ。大中臣輔親の詠歌を思い出して、霞の隙間から漏れくる月影が遠い波間にかすかに輝いているので二首詠うという話。

ここでの二首は、未だ俗心が残る段階であるこ

とを伝えるかのような撰であり、そのことがこの段の主題であろうが、同時に伊勢に移住してから二見浦にも暮らした時期があったことを、西行の人生史のなかでプロットしておきたいという作者の意図があったようにも思われる。

花のさかりにもなりければ、神路山のさくら、よし野の山にも、はるかにすくれたりければ――

【18】春ともなれば神路山の桜は、吉野の桜にも勝るものなので、神官たちがこぞって御裳濯河のほとりに集まっては作歌するので西行も詠じた。風の宮、月読の宮、桜の宮でもそれぞれ詠じたという話。

ここで七首が採られることになるのだが、次の段で伊勢での件を一段落させようとするのもあって一挙に七首を撰じたという意図を感じる。さらには、それまで伊勢での段においては二首ずつ載せられてきた歌抄が、花の歌、月の歌とそれぞれを明確にカテゴライズされていたところを、この段で花月並べての構成としたところも、花月の歌人という印象を残そうとする目的を感じる。

さても此所にやすらひて、すてに三年あまりにもなりぬ。心さしたりし、東のかたも――

【19】伊勢においても三年余となり、寿命のほどもわかるものではないのだから、志していた東国へ向かうころかもしれない。さていよいよ出立というとき、これまで浅からず親しんできた人たちが集まって、夜をとおしての名残の絃歌を心にとどめて互いに涙したという話。

史実としては西行の伊勢における長期滞在は晩年であるので、出家後の青年期と思われるこの時期に三年余というのは合致しないことであるが、なぜこの時期に三年という設定にしたのかはわからない。なによりこの絃歌止まぬなかでの別れが、遁世者のそれとは隔絶していることに主題があるのだろうか。これより東国へ道心の旅に出るにあたり、まだまだ心が塵界にあることを印象づけん

がための段であるにとりたい。

#### IV 陸奥行

すてに、あつまのかたへ下るに、日数つもれは遠江国、天中のわたりという所にて、武士の――

【20】東国への途中、遠江国天竜川の渡し場で、武士の乗った船に便乗しようとしたところ、あまりの多さに船が沈みそうになった。すると武士が西行に下船せよというも、渡し場ではよくあることだと聞き入れずにいると、情け容赦なく鞭で打ちつけてきた。それは頭から血を流すほどのものであったが、西行は恨むどころか合掌して下船した。それを見て、連れ立っていた入道は泣き悲しんだのだが、西行は、仏の御心は、と同行者を諭した。旅をつづけていれば、この先も同様のことは起こるであろうし、そうなれば互いに苦心することになるだろうと言って別れた。そしてこの同行者が、北面のころの西行の姿を思えば、このような情けなく映る様子に辛い思いとなるのも理であろうという話。

これも『物語』における代表的な挿話であり、『十六夜日記』でも触れられるものである。ここでの西行は、その行動といい、口上といい、一見悟ったような具合に見えるが、自らに言い聞かせているのが実情であろう。もちろん修行の身である西行が過去の武勇に囚われることなく、仏道精進しているという印象を植えつけようとするための話ではあるが、それとともに最後の一文も重い主題のように思われる。つまり俗世においては情けないと思われる姿を同行者に晒すことは、その人を苦しめることになってしまう、という他者感覚溢れる情愛の持ち主であったということである。

西行心つよくも同行の入道をは、おひすてたりけれ共、年ころあひなれしものなれば――

【21】西行は、強がりながらも同行の入道を京へ

と追い捨てたが、親しき者であったのでさすがに名残惜しい気にもなりながら、小夜の中山、このままの明神社の前にて、金剛經を唱えて礼拝し、中山を越えて一首詠んだという話。

この段では最後に詠まれる「年たけて又こゆへしとおもひきや」歌が有名なものであるが、すでに一度越えたことのある小夜の中山を再び踏破したことへの感慨を詠ったものであるからして、明らかにこのテキストには似つかわしくない。よってここでは仏教の真理が色や音などの外側にあるものではなく、そこに求めようとするのは邪道であり如来を感じることはできぬという金剛經の偈が主題となろうが、それとともに文脈と歌の解釈の齟齬が生じてでもこの代表歌を『物語』に載せることは作者の絶対的な決めごとであったかのようにも想像させる。

たゝひとり、あらしの風の身にしみて、うき事いとゝ大井川、しかいのなみをわけ――

【22】ひとりになって嵐の風も身に堪えてこの方、駿河国岡部の宿に着いた。その荒れ果てた御堂で休んでいると、その後戸に見覚えのある古い檜笠が懸けられているのを見つけた。それは、いつぞやの春に都で契りを結んだ僧侶に法華經の經文を書いて渡したものであった。もしやと思ひ涙を堪えて、宿の主聞いてみれば、京よりこの春に下ってきたが、ここで病死し、その屍は犬が食い散らかしてしまったのでこの近くにありましようとのことで探してみるも見つからずという話。

世の無常を檜笠をモチーフにした話に仕上げながら、我は身命を愛さずただ悟りに至らぬことを惜しむのみという法華經の教義を伝えようとしている。

かくうちなかめてゆく程に、はつ秋風も身にしみて、いつしか野へのけしきもあはれに――

【23】このように物思いに耽って旅をしていると、初秋の風も身にしみて、いつしか野原の景色もあ

われに感じられ、虫の声も聞こえるようになり、誰の言伝てを待つのもなく越路から雁も渡って来たりして、心細くなるにつれ歌を詠む。その昔、在原業平中將が蔦や楓のなかで道に迷い詠んだ歌も、その宇津の山辺を越えることも古人が恋しい気持ちにさせる。清見が関に着けば、沖の波が岩に砕けながら月の光が水面に満ちた様子は聞いていたよりもすばらしく感じられて詠ずるという話。

この段から『物語』は、しばらく歌枕をたどつての東国への空間的移動を進めていくこととなる。

するかの国にかゝりて、在中將の、山はふしのね、いつとてかといひけんも――

【24】駿河国にさしかかり、業平中將が「山はふしのね、いつとてか」と詠んだのも、まったくそのとおりに思えて、はるかに富士の高嶺を見上げれば、煙立ち上り、山の中腹は雲に隠れ、麓には湖を抱き、南には裾野、前には満ち満ちた海があり、豊かな漁を助けるものである。都を出立してから、多くの山川江海を越えてきた旅の苦しさも、ここで少し忘れられそうな気持ちになれたという話。

あしから山にかゝりて、むかし、実方の中將の名もあしからの山なれはと詠め、又白霧山深――

【25】足柄山にさしかかり、藤原実方中將の「名もあしからの山なれは」と詠じたこと、また「白霧山深くして鳥一声」といった人のことも思い出しているところ、木枯らしが身にしみたところで一首詠む。また相模国大庭というところの砥上原を過ぎる際、野原の霧の隙間から風に誘われるように鹿の鳴き声が聞こえてきたのでまた詠む。その夕暮れには、沢辺の鳴の飛び立つ音がしたのだから詠ずるという話。

さして、いつくを心さすともなれば、月のひかりにさそはれて、はる／＼と――

【26】どこを目指すということもないので、月の光に誘われて武蔵国に足を踏み入れると、その風情に武蔵野の野辺を訪ねた古人が懐かしく思われ、「今宵の宿さえ月の美しさに忘れて、明日行くはずの道を進むこととしよう」と口ずさみ行くと、集落まではまだ少しあるというところに庵がある。怪訝に思い覗いてみると、普賢菩薩の絵像、法華経八巻が目に入り、そこには頭も眉も白くなった九十を過ぎたと思われる老僧が、「閑かなところにて修行するがよし」と法華経を誦する。「仙人なのでは」と思いながら素性を聞くと、「郁芳門院の上位の侍でしたが女院の崩御後出家して諸国修行し、気づけばこの武蔵野へ二十九のときより六十年余とどまっています。すでに七万余の法華経を読誦しているでしょうか」という。西行も門院のことは知らぬものでもないで、互いに語り涙した。明け方の別れが名残惜しく思えて詠ずるという話。

この武蔵野の遁世者譚は『発心集』『撰集抄』『雑談集』にも見られるものである。『東関紀行』にもあるように東国で発心し西方浄土へということが理想であったことから、それに因んだこの段であったと思われる。あくまでも勸進目的や歌枕をもとめた旅ではなく、己の修行のための陸奥旅であるというストーリー展開である。

みちの国へ下りけるに、しら川の、せきと、いう  
ふ所にとゞまり、能因入道、都をは――

【27】いよいよ陸奥へ下って行くと、白河の関というところで足を止め、能因入道の詠じた「都をは、かすみと共に、立ちしかと、秋風そふくしら川の関」の歌を思い出し、ことさらに月が冴えて美しくあったので、関所の柱に歌を書きつけた。翌日、関のあった山を越えて進んでいると、七度曇って八度雨かの如くに、時々雨が降り、特別あわれを感じる夕暮れを詠むという話。

これは、白河の関という歌枕がモチーフになったテキストである。『山家集』などでは歌とともにその詞書からも、西行が能因を慕っていたことがうかがわれるのだが、『物語』のなかではこれまで

の歌枕になぞった段と同列の扱いであるところに、作者の創作においてはこの関係性に重きを置いていないことが推量できる。

さても、関屋をたちて、日数、すくる程に、はるかなる、野中に、ゆきくれて、しつか――

【28】関所を立てて幾日かが過ぎたころ、はるかにつづく野原のなかで夕暮れとなってしまった。粗末な伏屋で、夜が更けるほどに月は光り、都で眺めていたときよりもあわれに思えて、「月を見るたびに、お互いに思い出しましょう」と契りを交わした人のことが思い出されて詠むという話。

ここで注目すべきは、作者が「契りを交わした人」を誰ということをはのめかすことも、誰かを想起させることもしていないことである。妻なのか、恋慕の相手なのか、それ以外なのか。これまでの逞しいほどの創作を考えれば、この段は如何様にもドラマチックにできそうなものである。しかしそのように展開させていないということが、逆説的に『物語』を恋愛物に仕立てる意図がなかったことを暗示している。それは、「仏道と歌道」や「悟と恋」というような二項対立でとらえようとせず、どうしても「仏道」「悟」という主題で造形したかったのではないかという考えに逢着することもできる。

かくて、つほのいしふみ、ぬまたち、なんといふ、  
所所をすきて、ある野中をすくるに――

【29】壺の碑、沼館などをとおり過ぎて、とある野を過ぎ行こうとしているときに、なにやら気にせずにはいられない佇まいの墓があるのに気づき、草刈人に聞いてみると、実方中将と申される方のお墓であると答えるのを聞いて、あわれに思えて詠むという話。

これは『十訓抄』などに見られる、一条天皇によって陸奥守に左遷されその任地で没した藤原実方の伝承に因んだテキストであり、採られた二首とともに、実方の無念に思いを馳せることとその



先にそれもまた無常の理であるということをも物語る内容となっている。

あくる、やつかる、ゑひすかしま、しのふの郡、  
ころも川、いつれを、わきて—

【30】悪路や津軽、夷が島、信夫の郡、衣川などの名所を過ぎて行くと出羽、陸奥両国を従えて、平泉を本拠とした藤原秀衡という権勢を誇る者がいた。かねてから、和歌の道に通じていると聞いていたので訪ねてみると、先祖秀郷からの血縁、ここで遭うのも何かの縁と恋百首を詠むことを勧められるも何とはなしに詠まざりながら、千里の浜で見た夢を思い出して詠じた。秀衡には四、五年とどまることを勧められたが、「無益なこと」と思い秋の末になってから後にしたという話。

『山家集』や『吾妻鏡』などにより、西行が東大寺勸進目的で老年期に陸奥旅に出たことは史実として徴証されていることより、秀衡との間柄がこの段のような味気ないものであったことは想像し難いところである。とはいえ、その関係性を作者が知らない、もしくは連想できないと考えるのも尚早であろう。なぜなら、「先祖秀郷からの血縁」ということに触れているからである。それを契機に創作することは容易であろう。しかしそうしなかったことは、あくまでも西行の旅の目的地がここ陸奥ではないこと、目的地なき旅であり、目的は修行である、すなわち旅自体が目的であることが『物語』の本流であることを貫くためであろう。また、ここで恋歌を連ねていることも目をひくのだが、秀衡が羈旅歌や釈教歌などの他にもいくらかもある歌のなかから、敢えて恋歌を求めたということが不自然に映る。前々段において推察したように恋愛物としたいくない作者だが、『物語』において西行像を構築するうえでは、恋歌の存在を蔑ろにすることはできないがための苦肉の策ともとれる。

あるかた山かけの、はにふの小屋にとゞまりたり  
けるにねやの、秋風身にしみ—

【31】ある山陰の粗末な小屋にて、寝床に秋風が吹き込み身にしみ、きりぎりすの声も弱まりゆくのがあわれに思えて詠む。都だけでなく、どこでも年の暮れには誰の心も急くことがあわれに思えて詠む。年が明け、出立と同時に深山の霞も立ち上り、都の方へと進んで行けば軒先の梅の香が足を止めさせるところで詠むという話。

ここでは、西行の自然詠を紹介する仕立てとなっている。

かくて、山と寺をつたひ、ゆく程に、四月のはしめはかりに、美濃国まで—

【32】こうして、山々寺々をつたいながら過ぎ行くと、ときすでに四月となり美濃国まで上ってきたが、捨て去ってきたとはいえ都のことなどが気になって「何か便りはないものか」と思っていると、ほととぎすが二声三声しながら過ぎ行くところで詠むという話。

これも前段につづく四季の自然詠の紹介となっている。そして、東国の旅にまつわる段がここで終了となり、次からは帰洛後のテキストへと進む。

## 注

- <sup>1</sup> 『駿河台大学論叢』48, 49号, 2014, 2015
- <sup>2</sup> 本稿の進め方は、『西行物語』全テキストを、適宜その内容から一つのまとまりと思われるテキスト毎に区切りそれぞれを段とし、その要略と主題を推量していくこととする。
- <sup>3</sup> 拙稿「中古末法期から紐解く現代社会の死生観序説（上）」II-1生涯区分『駿河台大学論叢』48号では説明がつかないことなどである。
- <sup>4</sup> 本稿における『西行物語』全テキストは、正保三年版本『西行物語』国書刊行会、1974による。
- <sup>5</sup> 前掲正保三年版本『西行物語』では、「憲清」とされているが、本稿要約においては「義清」と

記述する。

<sup>6</sup> 『駿河台大学論叢』48号, 2014

<sup>7</sup> 史実としては, 二十三歳での出家ということが  
徴証されているが, 『西行物語』では二十五のとき  
とされている。

<sup>8</sup> 『駿河台大学論叢』48号, 2014